

(英語版)

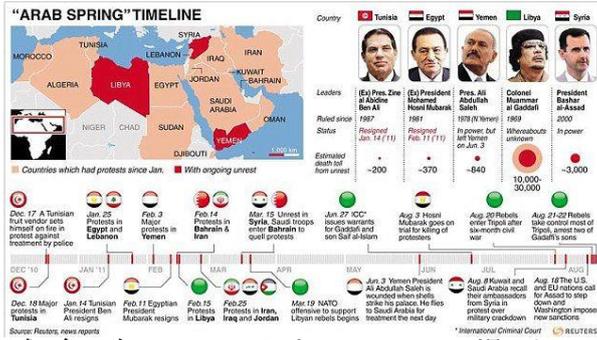
(アラビア語版)

(目次)

見果てぬ平和 — 中東の戦後75年 (百八十)

第七章 「アラブの春」 — はかない夢のひと時 (十三)

百八十 短かった春の宴 (五―五)



エジプト以外の中東各国の「アラブの春」はさらに短かく、むしろその後混乱と無秩序のオスに陥った例の方が多くくらいである。リビアではカダフィが倒れた後、大量の武器が闇市場に流れ、国内の部族同士の内戦に発展した。またイエメンではサウジアラビアの仲介でサーレハ大統領が退場し、ハーディー暫定大統領のもとに新政府が発足したものの、部族社会のイエメンではフーシ派勢力が勢いを増し、サーレハ元大統領も加わって首都サナアを占拠した。ハーディー政権はアデンに逃れ、サウジアラビアなどのアラブ連合軍の空爆作戦で何とか命脈を保っている状態となり、国際社会の平和の基準からはリビアと共に失敗国家の烙印を押されている。

「アラブの春」が失敗国家に終わった例はシリアがその最たるものであろう。同国ではアサド政権、IS (イスラム国) 勢力、スンニ派反政府勢力等が四分五裂し、そこに国際社会の勢力争いも絡みまさにくんずほぐれつの覇権争いを繰り返した。国際的な協力によりISはほぼ壊滅したが、欧米及びアラブ諸国が和平問題でもたついている間に、ロシアの支援を受けたアサド政権が実権を握った。「アラブの春」の担い手として期待されたシリアの民主勢力は実力不足を露呈し、完全に埋没したのであった。

「アラブの春」とは一体何だったのかという議論が絶えない。否、むしろ「春」などと言う甘味な言葉が誤解を招いたとあって良いのかもしれない。欧米諸国は「春」という言葉に自分たちが信じるイデオロギー「民主主義」を重ねた。彼らは民主主義こそ現代社会の唯一絶対により正しいものだと言張する。仮にそうだとすると彼ら欧米諸国は絶対的（と自分たちが信じる）価値を押し付け、世界各国が有する多様な価値を否定していることにならないだろうか。

ともかく今言えることは「アラブの春」は短い宴の春だった、ということである。

（続く）

荒葉 一也

E-mail: Arehakazuyal@gmail.com